



栃木市中根八幡遺跡

Nakanehachiman Research Project



中根八幡遺跡学術発掘調査団

中根八幡遺跡とは

中根八幡遺跡は、栃木市南部、渡良瀬遊水地に面した台地縁辺部に立地する縄文時代の遺跡です。2015年度から國學院大學栃木短期大学と奈良大学が合同で学術調査を続けてきました。

これまでの調査で、中根八幡遺跡では縄文時代前期(約6000年前)に活動が始まり、中期中葉(約5000年前)～晩期前半(約3000年前)は途切れることなく多くの土器がみつかっています。同じ場所を数千年間と使い続けるという縄文人の、この場所への強い思いがうかがえます。

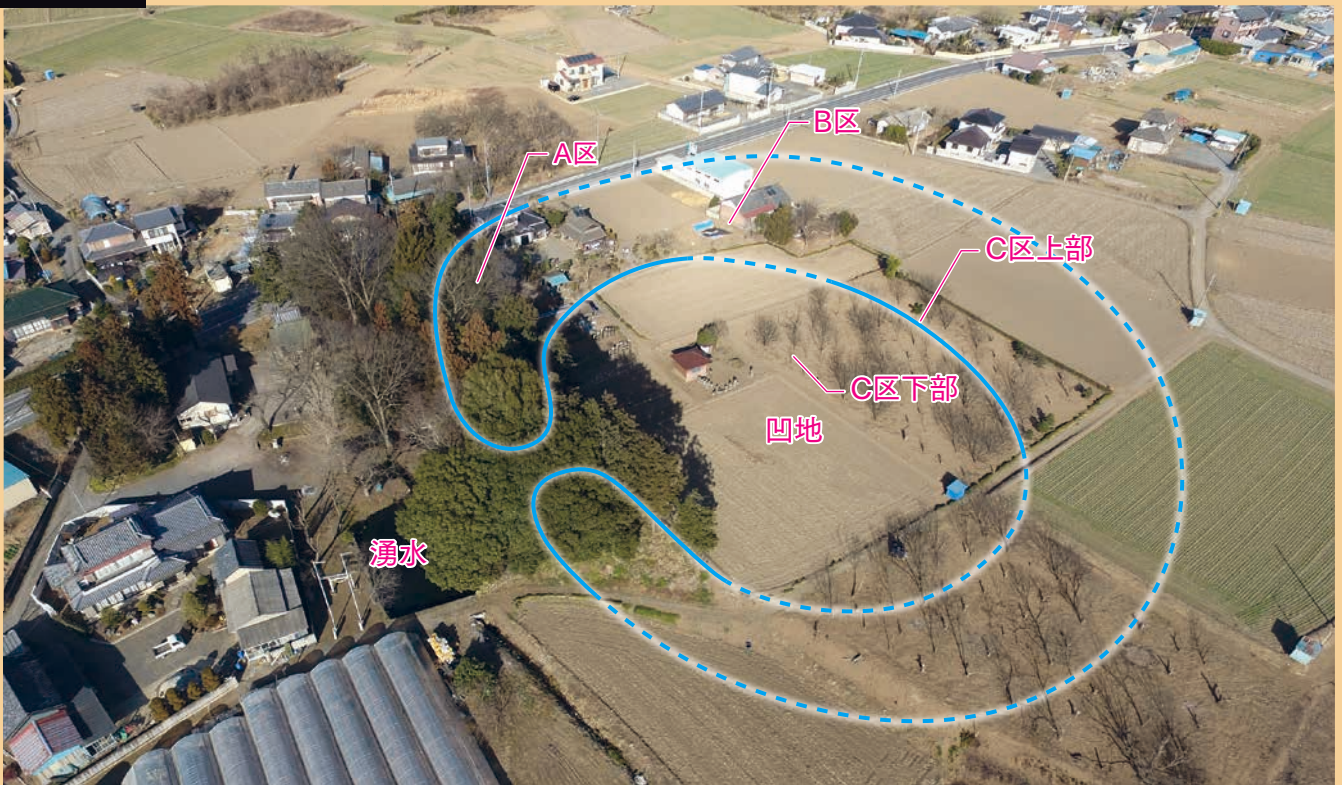
【環状盛土遺構】

中根八幡遺跡は、「環状盛土遺構」と呼ばれる遺跡地表面がドーナツ状に大規模な盛り上がる遺構が特徴です。その性格については、意図的な構造物としての盛土という見解や、長年の生活で意図せず形成されたものとする見解など、さまざまな意見があり、個々の遺跡によっても形成過程が異なる可能性が指摘されています。

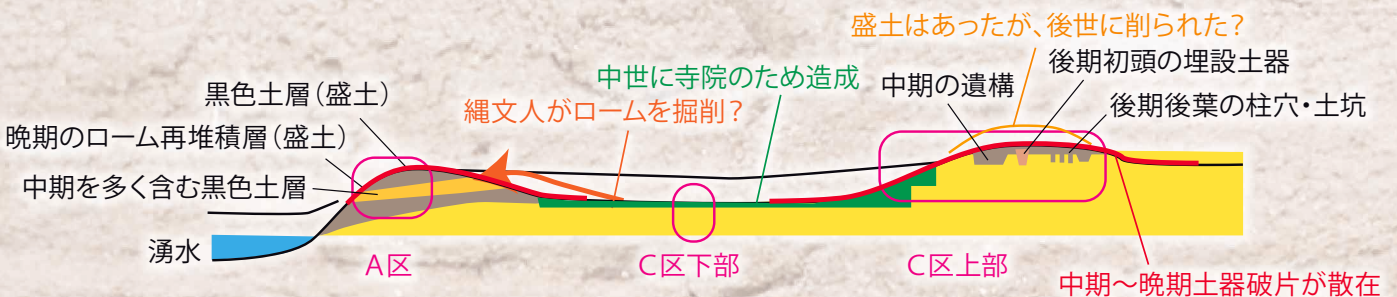
〈環状盛土遺構の分布〉



〈遺跡の構造〉



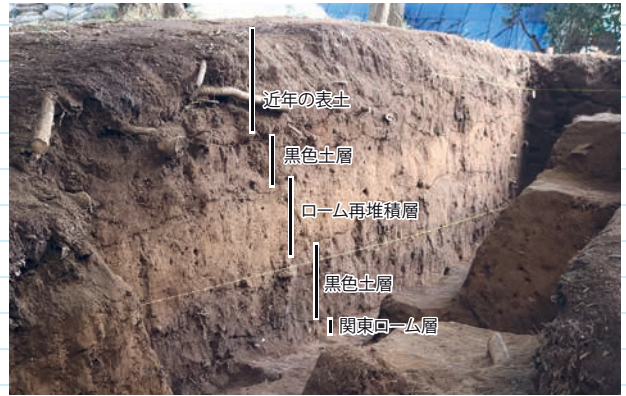
遺跡の直下には豊富な湧き水があり、これに向かって開いたドーナツ状の高まりが環状盛土遺構です。一部削平されていますが、縄文人が築いた盛土の姿をよく残しています。この高まりの部分に家を設けて暮らしていたものと推定されます。



A区の調査

これまで湧水に近い斜面側のA区を調査してきた結果、現在の地表から約2m下に、この地域の基盤層である、黄色い関東ローム層が見つかりました。この上に多量の縄文土器を含む黒色土層が堆積していますが、中程にはローム層に似た黄色い土が広がっています。

そこで、火山灰考古学研究所に委託して分析を行ったところ、年代の異なる縄文時代以前の複数の火山灰が混じっていることがわかり、縄文時代晩期の人々が周囲の関東ローム層を掘り、この場所に盛土したものと推定されました。



どぐう
土偶

土製の人体像ですが、詳しいことはわかっていません。全身が残ることは少なく、これもお腹の部分を中心とした破片です。



みみかざり
耳飾

ピアスのように耳たぶに孔をあけてつけるものです。模様の無いものもありますが、中には非常に精巧な透かし彫りをしたものもみられます。

どっこいし
独鈷石

斧を象徴化したもので、儀式的の道具またはリーダーの力を示すものと考えられています。仏教の独鈷杵に似ているのが名の由来です。本例は片側が欠損しています。



せきすい
石錘

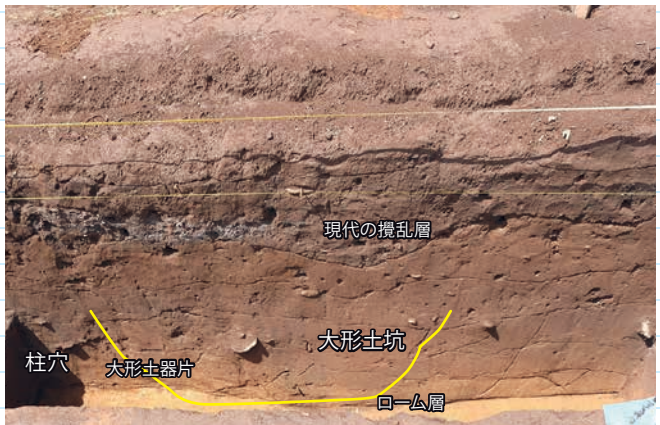
水中で網を垂らすおもりす錘です。網漁のあったことがわかります。



B区の調査

上層が削平されていてA区のようなロームの盛土の有無は確認できていませんが、大きな土坑(穴)を確認しました。大形土坑からは後期中葉(約3500年前)の土器が出土しています。

2021年度の調査では、さらに下の面からいくつかの柱穴を確認しました。深いものは確認面から60~80cmも掘りこんでおり、中からは中期の土器が見つかりました。



どうぶつそうしよく
動物装飾

B区で採集されたもので、耳を張りだした動物の顔から首の部分です。土器についた装飾突起か、動物形土製品のいずれかと想定されます。



いしさじ
石匙

つまみ付のナイフで、その形から前期のもの可能性があります。



C区の調査

〈2019年度〉



中央窪地部分のC区下部では、縄文時代の黒色土層はほとんど発見できませんでした。おそらく中世以降にこの地に立てられた寺院の造成で削られたものと思われます。

東側の高まり部分であるC区上部でも、A区同様の盛土の存在が予想されましたが、実際に発掘してみると、地表から50cmほどで関東ローム層が発見されました。東側はももとの地形が高くなっていたことがわかります。周囲には縄文時代後・晩期の土器が多数散布しているので、縄文時代にはそれらを含む盛土があったものが、後世に削られた可能性もあります。

2019年度の調査では、最も高い部分から縄文時代後期後葉（約3300年前）の柱穴や注口土器を伴う土坑、やや低い箇所から後期初頭（約4300年前）の埋設土器、さらにその下から中期後葉（約4700年前）の土坑など、長期間の生活の累積を確認しました。



まいせつどき 埋設土器

現存高62cmの大形の土器を地中に埋めていました。中からは焼けた骨片が見つかっています。



こだま 小玉

C区周辺で採集された、直径約1cmの滑石製の小玉です。

〈2021年度〉

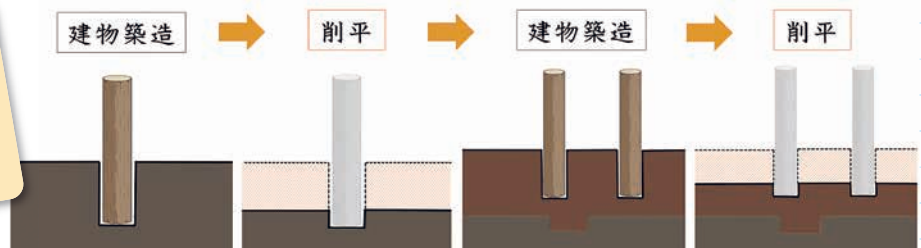


●浅い柱穴

2021年度の調査では、多数の柱穴が浅い深さで見つかりました。柱穴は、建物の柱を地中に刺した跡の穴で、ある程度の深さがある状態で検出されるのが一般的ですが、新たに見つかった柱穴は深さがなく、この深さでは建物を建てられない浅さです。このことから、建物築造時は深さがあったものの、建物を撤去し、柱を抜き取った後、削平し、また土を盛り建物を築造する、というサイクルを繰り返していたと考えられます。

ほうしゃせいたんそねんだいそくてい 放射性炭素年代測定

2箇所の柱穴の炭化物の年代を測定したところ、約3300年前から3400年前(後期後葉)を示す値になりました。



遠方の地域との交流

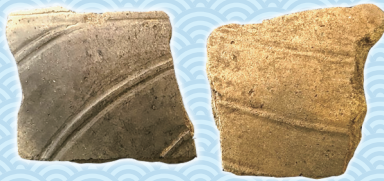
縄文時代は、現在と同じような環境のもとで、各地域の独自の文化が育まれました。同時に、縄文人はさまざまなモノ・情報をお互いに交換していたようです。

中根八幡遺跡でも、そうした遠方の地域との交流を示す土器や石器が見つかっています。



ちゅうこうどき
注口土器

東北地方の特徴である丸い貼り瘤をもった土器で、下半部のみが、土坑から逆位で出土しました。



びりゅうせんもんどき
微隆線文土器

両側の粘土の粘土を凹ませることによって僅かに線が浮き上がる文様の書き方をしています。東北地方の注口土器に特徴的な特別な文様です。

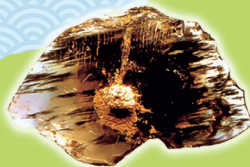


とうほくけいふかばち
東北系深鉢

B区の大形土坑から見つかったもので、東北～関東に広く広がる特徴的な器形・文様をもっています。

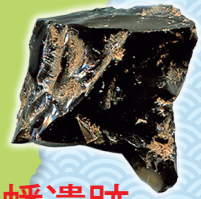
こくようせき
黒曜石

割れ口がガラスのように鋭い黒曜石は石鏃などに重宝されました。これまでに見つかった19点の産地を分析したところ、栃木県矢板市の高原山産2点、長野県の星ヶ塔産9点、同県小深沢産3点、東京都神津島産5点という結果となり、遠方から持ち込まれたことが分かりました。



▲ 小深沢
▲ 星ヶ塔

▲ 高原山

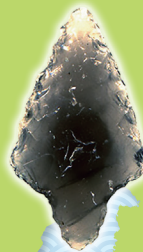


● 中根八幡遺跡

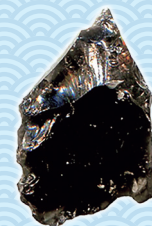


かしはらしきもんようのはち
檜原式文様の鉢

上下に向かい合った曲線文様は関西方面に特徴的な土器文様が変化したものと考えられます。



▲ 神津島



発掘調査の様子



STEP 1

縄文人の道具がどこから見つかったのかを記録しながら掘り進めていきます。移植ゴテや両刃鎌を使って丁寧に掘り下げていきました。少し掘っていただくとたくさんの縄文土器や石器が見つかります。大きい破片や小さい破片、古いもの新しいものが混じっていることが分かります。



STEP 2

よく土の断面を確認すると色や硬さや、混じっている炭や骨の量が異なることに気づきます。縄文人が長い時間をかけて土を盛ったことがわかります。これらを測量の道具を用いて図面として記録することも大切な調査の1つです。

現場公開・情報発信



子ども発掘

小中学生向けの発掘体験講座を開催しています。



オンライン説明会

コロナ禍のため一般向けの現地説明会はオンラインで開催しました。



現地説明会

地元の方々向けに調査の様子をご覧いただきました。



成果展示

栃木市役所や國學院大學栃木学園参考館などで成果を展示しました。



Facebook もチェックしてね!

www.facebook.com/nakanehachiman/

中根八幡遺跡学術発掘調査団

(國學院大學栃木短期大学・奈良大学)

〒328-8588 栃木県栃木市平井町 608

編集：國學院大學栃木短期大学考古学研究会

空中写真撮影：國學院大學考古学研究室